

■ 人もコンクリートもじっくり育成



宇 治 公 隆*

「人生 100 年」の言葉をよく耳にする。この世に生を享け、幼児から少年、青年、壮年、老年、と社会生活を送っていく。ただ、人の成長の仕方はまちまちである。10 歳にも満たないテレビドラマの子役の演技が賞賛されたり、20 歳でオリンピックのメダリストになったり。一方、大方の人は、日々、淡々と働き、生活している。大学で学生を見ていると、低学年のうちにはさほど目立たなかったが、4 年生になって研究室に配属されたあとの成長が著しい者も結構いる。彼らが大学院に進学すると、放っておいても自分で考えて研究を進めるから楽しみでもありラクでもある。

世の中では、幼少期における教育が、その子供の将来を左右するといわれる。しかし思うに、一人一人に与えられた才能はまちまちで潜在的能力に大きな差はないのではないかと思う。如何に個人個人の才能を引き出してやるかなのであろう。学問、スポーツ、芸術、……、どんな才能があるか、それに巡り合う機会を与えてやれば親の責任は果たせたといえる。ただ、最近ではかわりすぎるくらいがあるようなので要注意。子離れ親離れが問題になるややこしい時代である。

私も含め、平々凡々と日々暮らしてきた者の頭の中には「大器晩成」の言葉がある。いつか、多くの人の役に立つ画期的な技術を生み出すことができるかもしれない、という淡い夢を胸にこつこつ仕事をしている。一人一人の能力に差が無いとすると、チャンスやヒントとなる事柄に反応する感性を磨いておかなければならない。いつかチャンスが訪れたときにそれをしっかり捉まえられるように。結果、人生は、自分の信念に従って仕事や社会活動をしていけばいい。いつか、日の目を見ることがある。

一時期、「コンクリートから人へ」や「人からコンクリートへ」という言葉が社会を騒がせた。両者はまっ

たく正反対のモノの象徴なのだろうか？ある意味、「人もコンクリートも似たようなモノ」と思える。コンクリートの強度発現を考えてみると、必要な材料を練り混ぜ、型枠の中に入れて硬化を待つ。所要の養生を行って強度発現を促すが、この強度発現は人の一生と同じである。

現場打ちコンクリートの場合、練り混ぜられたコンクリートはその雰囲気温度に見合った速度で水和反応を生じ、次第に硬化して強度を発現する。夏場で雰囲気温度が高ければ強度発現も比較的早く進み、冬場では強度発現も緩慢になる。また、初期材齢時に散水をしっかりとすることが強度発現の必須条件であるが、散水などの湿潤養生を怠ると強度発現は停滞しがちである。コンクリートを扱っている者として、これほど、人の手の加え方で違いが明確になるということは面白い。

上記の雰囲気温度の話のおまけとして、一般に長期材齢における強度は、雰囲気温度が低い場合の方が結果的に高くなるということである。セメント化学的には、低い雰囲気温度下では、水和生成物が細かく緻密な組織を形成していくことになり、最終的に高い強度を得ることができるという説明になる。納得である。これを人間で考えると、才能を見極めるために幼少期の教育はちゃんと行い、じっくり才能を育み、慌てず、長い目で成長を期待するのが良い。また、養生中の水分補給に関しても同じで、自身の恒常的な勉強や技術の習得が無ければ、成長は期待できない。

人もコンクリートも大器晩成はつきものである。コンクリートへの配慮のほか、われわれ人間も、日々勉強を続けて、納得のいく業績を社会に提供できるようになりたいものである。

* Kimitaka Uji : 本工学会会長
首都大学東京 都市環境学部 教授